

仕合わせ



第225号

令和2年 12. 1
(毎月1日発行)

日蓮聖人のご生涯(二)

住職 谷川寛俊

先月号の続き・・・

40歳 伊豆法難(四大法難の2番目の法難)

鎌倉街頭での辻説法中、幕府の命により由比ヶ浜から、伊豆の国(静岡県)伊東へ流されるも、漁師舟守弥三郎夫妻により助けられる。

43歳 小松原法難(3番目の法難)

伊豆・伊東の流罪を赦(ゆる)され、鎌倉に戻り、翌年母のお見舞いのため、故郷(千葉県小湊)へ帰る途中、地頭の東条景信らの念仏信徒の襲撃を受け、弟子一人殺され、自らも眉間に傷を受けたが、ここでも一命を取り止められる。

47歳 再び「立正安国論」を幕府に献上

蒙古(もうこいモンゴル)の使者が来日したこの年、自分の予言が的中したとして、時の執権(現・総理大臣)北条時宗に再び『立正安国論』を献上

する。更に幕府や、他宗の代表者11ヶ所に書状を送りました。その『立正安国論』の内容は、「なぜこの日本国が乱れ、政治も乱れ、人心も乱れ、しかも時の天皇までも島流しに遭うという前代未聞の様相を呈しているのは、正しい教えが示されていないが為である!」と。そのことを討論したかったのです。

50歳 龍口法難・佐渡流罪

結果的には、幕府からの一方的な討論拒否。ついには無実の罪で捕らえられ、あの有名な龍口での首を刎ねられんという四大法難の中でも最大の法難を被ることにになりました。しかし、日蓮聖人は力強くおっしゃいます「法華経の行者は必ず守られる」と。その御言葉の通り、無事に一命を取り止められ、死刑は中止。幕府は日蓮聖人の命を取る事が出来ず、ついに島流しという暴挙に出ることになりました。

51歳 佐渡での日々

佐渡では当初、墓地のそばに建つ、塚原三味堂(つかはらさんまいどう)というあばら小屋での生活で、周辺の念仏信徒と法論を戦わず日々を過ごされ、『開目抄』や

真成寺ホームページ



玉蓮山 真成寺

編集部 谷川久仁子
TEL・FAX 0765-22-2268
携帯 080-3744-2523
こちらの番号でもお寺につながります。

『観心本尊抄』という、最も大切な書物を著述される。

53歳 身延入山

当時、佐渡ヶ島に流されて許された者はなく、時の順徳天皇さえも戻ること出来ず、佐渡にお骨を埋められるほどでした。

幕府は日蓮聖人のあらゆる予言(蒙古襲来・飢饉(ききん)・疫病(えきびょう)等)が的中するため、恐ろしくなり、死なせてはならぬ。生きて本国へ帰すようにと、流罪が許され、鎌倉に戻られた日蓮聖人は、三たび幕府へ『立正安国論』を献上するも、またしても却下される。

国の安泰を祈り、人々を救う(正法)を受け入れないのであれば、もう仕方がないと当時の執権を哀れみ、信者の波木井実長公のお招きにより、身延山に入られ、弟子、信者の教育に当たられる。(現在の日蓮宗総本山・身延山久遠寺の始まり)。

61歳 池上にて入滅

9年間住み慣れた身延山での生活も、やがて年老いて病弱になり、弟子・信者の勧めもあり、常陸の国(茨城県)に湯治療養に向かわれる途中、武蔵国(東京)池上邸にて、10月13日朝8時15分頃、61年の波瀾万丈の御生涯を終えられる。この時、大地が震動し、季節外れの桜の花が咲き誇ったと伝えられた。

このように日蓮聖人は、正しい法を立てて国を安泰にする(立正安国)ため命懸けの大変な御一生を送られたことを私達弟子・信者は心にとどめ、守つていかなければなりません。大聖人の思いと、考えを、もう一度深く知る事により、明年お迎えする御降誕800年に対する御報恩に謝したいと思ふ次第です。

